

年の瀬になると、大半がインバウンド客に思えた繁華街にも、それなりに日本人が足を運ぶようになり、ここ祇園も歓楽街らしい賑わいを取り戻している  
京の街並みは人の波もまた風情のひとつである

界限では、若い人並みにまぎれ、年の離れたカップルも、手を繋いだり、腕を組んだりする姿を目にする

「お兄さん 店探してます？いい子が揃ってるところありますよっ！」

京都市客引き行為等の禁止等に関する条例によって、祇園は、客引き行為などの禁止区域に指定されているはずだが、そこかしこで平気で呼び込みをしている

名のある料理屋が軒を連ねる そんな一角にその高級焼肉店があった

京町屋を改装し軒先に提灯のかかるお店の暖簾を同伴カップルがくぐる。

お客がお店に直接足を運ぶのではなく、店の営業前に客とホステスが事前に連絡を取りあい、食事などしてから、客を伴って入店するシステムのことを同伴という

客は、同伴の対価としてお店に対して通常の飲み代以外に、食事代、同伴料、指名料を支払うことになる

ホステスはホステスで営業成績に直結し、バックマージン、指名料バックなどのインセンティブを得ることになる

男性は、ジャケパンスタイル。

堅苦しさを避け、敢えて崩した感のある洗練されたジャケットを着こなすちょっとあか抜けた白髪の老紳士

女性は、20代前半といったところだろうか

スタイリッシュな今どきの明るい子

かわいらしさと温かみを兼ね備えたふわもち質感のニットのワンピース

バルーン袖に淡いベージュのワントーンコーデ

かわいいなかにも上品な雰囲気を出すタイトシルエット

「いらっしゃいませ！お待ち申し上げておりました。カウンター席へどうぞ」

予約をしていたらしくふたりはお店の中に通され、早速飲み物を注文した

「お待たせしました～」

店員が、生ビールとソフトドリンクをもってきた

女性客が、鞆からおもむろにクスリを取り出す

「わたし　きのうから鼻炎やねん。最初にこれ飲まんと」

「風邪ではなく鼻炎か？まあともかく乾杯しよか？」

男性客が乾杯の音頭をとる

「マッチ一本火事の元　焼肉焼いても　家焼くな　かんぱーい！」

「かんぱあいっ　って　〇〇君　いきなり乾杯がオヤジなんですけど～」

相当な年の差があるにも関わらず、女は男を〇〇君と呼んでいる

〇〇君は乾杯でいきなりスベってしまったが意に介していない様子で  
懐からなにやら長細い包み紙を取り出した

「〇〇ちゃん　これで、好きなもん食べな」

「なにになに？」

〇〇ちゃんは興味津々にと〇〇君が取りだした包み紙の中身に期待するが…

「なにこれ！割りばしやんか」

「これで好きなもん食べな　としか言うたらんやろ」

〇〇君がヒヒヒと楽しそうに笑った

「もう！じゃあこれでお肉食べまくるわ」

「そやな　すみません　注文いいですか？」

メニューをみながら、食べきれるのか？というくらい注文するふたり

ビジュアルでも楽しませてくれるおいしいお肉たちに舌鼓を打つ

「江戸時代ってな、ほんまは日本では肉を食べたらあかんかったんや」

「うそやん」

「ほんまや でもそれは建前 ほんまはみんな肉食べたいやろ？」

「うんうん」

「『薬喰い』いうてな、病気を治すためとかやったら食べてもよかったんや」

「やくぐい？」

「要は、薬としてなら、肉を食べてもよいっていう 暗黙のルールみたいなんが  
あったんや ○○ちゃんも肉食べたら鼻炎が治るかもやで」

「あっ 鼻止まったかも でもそれってなんでもありなんちゃうん？」

「そう。でもそこは大人 肉を食べるとき、肉を食べるとはいわんのや」  
江戸っ子は、しゃれつけがあるといわれている

「肉っていわんの？」

「たとえば、鹿は紅葉」

「それ！なんかそれ聞いたことある」

「そやろ！イノシシは牡丹」

「あっ 牡丹鍋！」

「それ！」

「馬は さくらや」

「さくら？え？じゃあさつき頼んだ桜ユッケって、馬のことなん？」

「そらそうや。牛のユッケ出したら、お店は営業停止になるで」

生食用食肉に関する法規制により2012年10月1日以降、生レバーやユッケなどの提供が禁止されたというくらい歴史がある

「そっか。そしたら牛はなんていうん？」

「牛？それは知らんなあ」

「知らんのか〜い」

男は、酒がまわってきたのか次第に思考回路がおそくなり、呂律もあやしくなってきたが、女の子は最初のドリンクを半分以上残している

江戸時代には、「ももんじ屋」といって獣の肉を扱う店が多くあった。お吸物、鍋物、田楽などに調理して出されていた。

明治の文明開化以降、牛鍋も登場し、時を追って庶民にも浸透していくことになるが、牛は家畜として育てられたため、野生の動物の肉と違って別名で呼ばれ使い分けされるには至らなかったとされる

注文したお肉とビールが、次から次と運ばれてくる

トングを片手に微笑む〇〇ちゃん

「〇〇君、わたしが焼くねえ」

厚切りなのに柔らかそうな牛タンを網に乗せ、合間合間に裏返し、ほどよく焼き色がついてきた

分厚いのに噛み切れる歯切れの良さ

噛むほどに口いっぱいに溢れ出る牛タンの豊潤な旨味

幸せホルモンと呼ばれる脳内神経伝達物質セトロニンと、アラキドン酸の一部が脳内で変化して生成される至福物質と呼ばれるアナンダマイドがふたりを幸せの渦にまきこんだ

今日の待ち合わせのことを振り返る男  
だいぶ酔いが回ってきている

「〇〇ちゃん 今日、待ち合わせ時間変更したやん？」

〇〇くーん！  
今日さ、6時半からでもいい？  
早めにお店行きたくて  
お店混むみたい どこも12月やから

これは、時間変更をお願いするラインの内容だ

「したした」

「あれな もうちょっと工夫したほうがええで」

「どんな風に？」

「肉を別名でいう江戸っ子と一緒に たとえばやなあ 店が忙しいとかじゃなく  
て 『少しでも早く会いたいから』とか そしたらこっちも無理してでも早く行  
きたくなるいうもんやんか」

「なるほど～！ 次から早く会いたいって嘘つくわ」

「おいおい！嘘、いうてもうてるやんか！」

「あ」

「〇〇ちゃんはまだまだ修業が足らんな そんなんでは紀州のドン・ファンに  
は見初められへんで」

「え？きっすいの同伴？なにそれ？」

「生粋の同伴やないわ！紀州のドン・ファンしらんのか？」

紀州のドン・ファンといわれた高齢の資産家男性  
彼が自宅で死亡していた事件は、令和6年12月12日、殺人罪で起訴された55  
歳年下の妻に対して和歌山地裁は無罪判決を言い渡した。  
まだまだ今後の行方については、どうなるのかわからないが確かなことがひと  
つある。  
そこに愛はなかった

加藤茶夫妻のように仲睦まじい年の差カップルもいるにはいる  
けれども、年の差カップルに愛が入り込む余地はいったいどれほどあるのだら  
う

まだ注文したものが残っていたが、〇〇ちゃんがソワソワしだした

「なあなあ 〇〇君 ちょっと時間が無くなってきた 遅刻したら罰金やねん」

「すみません お会計」  
あわてて会計をする男

腕を組み小走りで店に向かうふたり  
ふたりの行き先は決まっている 彼女の勤めているお店

「〇〇君 ご馳走様～ お肉めっちゃおいしかったー 今後はお寿司食べたい」

「よっしゃ 次は寿司食べよ」

「やったー！ 〇〇君 ごめんやけど 最初は隣に着けんと思う アフターの  
約束しているお客さんがもう待ってはるみたいやねん 席に戻ってくるまで待  
っというてなっ」

店の営業後に店外で食事やカラオケをして楽しむサービスをアフターという

店に入ると、先客がカラオケを歌っていた  
サザンの「闘う戦士たちへ愛を込めて」  
歌詞が秀逸だ 『魔力をもったオンナ達 それに魂を売るオトコ達ㇿ』  
客は、歌詞の意味を知っているのか知らないのか、熱唱している

冬空の下、〇〇君のような生粋の同伴こと紀州の…いや祇園のドン・ファンたち  
が街を景気づけ潤している

深夜、抜け殻のように帰路に着くオトコたち

街には行き場を失ったオトコ達の魂が彷徨っていた

おわり

追伸：「〇〇君」と「〇〇ちゃん」の「〇〇」については、お好きな名前を想像してお読みください